
トラスト物語

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラスト物語

【Nコード】

N8459Y

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

ウムブラ王国を襲ったダークドラゴンからウムブラ王国を救った英雄、そしてダークドラゴンの契約者として有名な父。コンストラクター

しかし、父の弟トウレチェの手によって父は殺され、主人公トラストは家族とバラバラにされてしまう。

トラストは、父の復讐を誓い行動を起こす！

プロローグ

人が、魔物という脅威を自らの力とする方法に気づき、1000年余り。人の世界に、契約者（コントラクター）という魔物を使役する人が増えていった。

フェッセ大陸の中央に位置し、北と東を山に囲まれているウムブラ王国の首都【グラーツィア】に家を構えている、トラスト・フロウは父のジェイ・D・フロウの弟、そして叔父上であるトゥレチェ・フロウに会えるのを楽しみにしていた。

ある日を境に、父と会わなくなりいつの間にか【グラーツィア】から南10キメルにある【パツシエ】という街に住んでいると聞き、悲しんだ。その日までは、王宮で使えている父の代わりによく遊んでくれた楽しい思い出がいっぱいだったのだ。

そんな叔父が、久しぶりに父を自分の誕生日に招く手紙を送ってくれたのだ。何故か渋っていた父を、何とか説得し行くことが決まった日から、この日が来るのをどれだけ楽しみにしていたことが。

「父上！ 父上！ 早く！」

急かして来る息子のトラストの様子に苦笑を浮かべながら、ジェイは妻のシルビアが娘のシオンの身支度を整え終えるのを見る。

シオンは、身支度が終わると笑顔で兄のトラストへ走っていく。シオンもトゥレチェに会えるのを楽しみにしているという事だろうと思う。

しかし、そんな子供たちの笑顔とは逆に、こちらの気は重くなっていく。何故、こんな時に弟は、私に会おうとするのか。

ウムブラ王国の南西にあるルークス王国。そこに攻めようとする陛下を、私が押し止めているこんな時に。

「父上！ 早くしないと遅れるよ！」

息子に促され、家の前に止まっている弟の迎えである馬車へと歩く。トウレチエは、自分の考えすぎだ、息子たちの笑顔を大切にしようとして無理やり嫌な考えが過ぎる思考を切り替える。

【グラーツィア】を出てから、3時間。漸く目的地に着いたのか動きが止まる。少しすると、馬車の扉が開けられる。開けられた先には、弟のトウレチエが疑いたくなるほどの笑顔で、こちらが降りてくるのを待っていた。

馬車が止まり、扉が開けられると叔父上の姿が見える。叔父上の姿が見えると、シオンの手を引き、馬車を降りる。そして、叔父上の前へと走りより笑顔を向け、久しぶりに挨拶をする。

「トウレチエ叔父上！ お久しぶりです。お誕生日おめでとう御座います」

「おお、久しぶりだな！ ありがとう、トラスト。それにしても大きくなったな。2人は今いくつになった？」

「僕は12歳で、シオンは10歳です、叔父上！」

「そうかそうか、もうそんな年か！ ついこの間まで、こんなだったのにな」

そう言うと、叔父上はトラストの臍の辺りを示す。それに、顔を膨らませながらもトラストは叔父上の手を握り、叔父上の家へ入ろうとしていく。

「叔父上、早く家に入りましょうよ！」

「おいおい、私の家なんだがな」

そう言いながらも、叔父上はトラストに手を引かれていく。そして、シオンも叔父上の手をトラストと同じように引きながら、家へと向かっていく。

そんな息子たちの様子に困った顔をしながらジエイとシルビアは、トウレチエの家へと入っていく。

家に入ると、すぐに長テーブルのある部屋へと案内された。入り口から、奥に父上、母上、そして僕にシオンが座り最後に叔父上が座った。

座ったのを確認すると、叔父上は両手を叩く。すると、入ってきたのは給仕ではなく鎧を着た兵士8人だった。その展開に頭がついていかず、兵士たちが自分たちの後ろに2人ずつ立つのを見守ってしまふ。自分の後ろに兵士が居ることに恐怖を感じ、震えていると叔父上が喋り始めた。

「トラストにシオン。すまないな、怖がらせて。だが、少し兄上に大事な話があるんだ。話が終わるまで静かにしていてくれ。そうすれば、兵士たちは何もしない」

叔父上に、そう言われトラストとシオンは恐怖に震えながらも首を何度も縦に振る。その様子に、叔父上は笑顔を浮かべると父上の方を見た。

すると、叔父上は呆れた表情を浮かべ顔を横に振る。

「兄上、そう睨まないでください。兄上がこちらの言うとおりにして頂ければ兵士は下がらせます」

「トウレチエ……！」

「そう怖い顔をしないでください。私は、陛下に頼まれただけです。兄上が契約しているダークドラゴン。その力を使い、ルークス王国を滅ぼすようにと……ね」

「ならぬ！　ダークドラゴンの力は抑止力だ。もし、戦争に使えば
ルークス王国だけではない！　我がウムブラ王国も滅びるしかない
ぞ！」

「ウムブラ王国の英雄、ジエイ・D・フロウ。本当は、兄上であれ
ば良かったが仕方ありません。ダークドラゴン……その力を私に譲
渡してください」

「ならぬ！」

「本当に、譲渡して頂けぬと？」

「くだい！」

「仕方ありません……残念です」

叔父上が頷くと、父の後ろに立っていた兵士2人が剣を抜き、父上
の口を塞ぎ、その剣を父へ突き刺す。そして、父の体から血が噴き
出しテールを血で汚す。そして、父を助けようと動こうとした母
も後ろに居た兵士に剣で刺される。

「父上！　母上！」

「父様！　母様！」

父上と母上の刺される姿を見て、トラストとシオンは叫ぶことしか
出来なかった。泣き叫ぶトラストとシオンを兵士たちは部屋の外へ
と連れ出そうと動く。トラストは、兵士に部屋の外へ連れ出されそ
うになりながらも、叔父上に叫ぶ。

「叔父上！　何故！？　何故、父上と母上を殺したんですか！」

「トラスト。貴方の父上は、力を持ちながらも、その力を国の発展
の為に使おうとしなかった……その罰です」

「そんな理由で！？　放せよ！　父上と母上の仇を！！」

「お前ら、トラストとシオンは黙らせて何処かの奴隷商に売って来
い！」

(子供の命まで取る必要はあるまい……)「

兵士たちによって、気絶させられたトラストとシオンを横目に見ながら兄であるジェイの死体から浮かび上がるリングに目を奪われる。これが1度、この国を滅ぼしかけたダークドラゴンのコントラクトリング。

逸る心を落ち着かせ、自分の人差し指をナイフで切る。切った痕から出てくる血を、そのリングに1滴垂らす。すると、そのリングは1度光を放つと消滅する。そして、再びトウレチェの右手首に現れる。その現れたリングを見やり、トウレチェは笑いを抑えることが出来ず辺りに響かす。

「くくくう、あははははは！　これで、私は！」

トウレチェは、そのダークドラゴンのコントラクトリングを手にすくぐにウムブラ王国の首都【グラーツィア】を指し、陛下へと謁見する。

陛下は、トウレチェとの謁見後。すぐに、ルークス王国へと宣戦布告する。宣戦布告をすると、ウムブラ軍はすぐにダークドラゴンを実戦へ投入する。ダークドラゴンの投入のためルークス軍の頑張りも空しくルークス王国は10日弱で滅び、ルークス王国の領土は、ウムブラ王国となった。

ブログ（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第1話(前書き)

2011/11/26 加筆修正

第1話

あれから、6年。そう父上が叔父上に殺されて、僕が奴隷に成り下がりがスキアという街で、剣闘士という生活を強いられて6年だ。何度、死にそうになった事か。だけど、トウレチエへの復讐という思いだけでこれまで生きてきた。いつか、必ず生きてスキアを脱出し、トウレチエを殺し父上の仇を取る。そして、妹シオンを見つけだし母上の元に帰るんだ。

「さあ！ やって参りました！！ 本日のメイン闘技！ 東、トラスト！！」

闘技場へ続く通路で待機していたトラストは、そう呼ばれると闘技場へと歩き出す。

闘技場へ出ると、周りから歓声が起こる。しかし、トラストはその歓声に心えることなく対戦相手が出てくる入り口を凝視し続ける。司会者は、そんなトラストの様子を気にした様子もなく、盛り上げるべく更に相手の戦績などを言ってから、漸く対戦相手の名前を叫び始めた。

「西、ジルバ！！」

司会に、呼ばれ西の入り口。トラストが睨む先の入り口から、トラストと同じく薄汚れた布切れを纏った13〜14歳ぐらいの少年が姿を見せる。

しかし、その姿には少年らしい雰囲気を感じられず、代わりに殺伐とした雰囲気を感じていた。

それも、当たり前前かと思う。この場所で、そんな雰囲気を残していたら生き残れない。そして生き残るために俺も、恐らくこいつジル

バも同情なんて気持ちはとっくの昔に捨てているはずだと思う。

「勝負開始!!」

司会から試合開始の言葉が出ると、ジルバはトラストに向かって走ってくる。そして、殺気を撒き散らし、右手に持っている剣を振ってきた。それを、トラストは体を横にずらし攻撃をかわす。

トラストはジルバの攻撃をかわすと、相手の首を目掛けて剣を振る。しかし、ジルバは剣を引き戻し、トラストの剣を受け止める。

ジルバは、受け止めるとトラストの剣を弾き、隙を作る。

トラストは剣を、弾かれ隙を見せてしまうがジルバが大きく剣を振りかぶってくれたおかげで、ジルバが剣を持つ右手首を掴みジルバを地面に引き倒す。そして、倒れたジルバの心臓に向かってトラストの持つ剣が突き刺さる。

「いや……だ！ 死にたくない……!!」

最後に、何かを言ったジルバを一瞬だけ見やりトラストは虚空に視線を送り司会が試合の終了を合図するのを静かに待つ。

「勝者！ 東、トラスト!!」

「（僕は、自分が生きるために他人を殺す……）」

司会が終了の合図をすると、閉じられた東の入り口が開けられる。トラストは、ジルバの血に濡れる剣をそのまま持ち東側の通路を歩く。トラストは、通路を真っ直ぐ歩いていると右手に食堂があり、食堂へと入っていく。

食堂へ入ると、長テーブルが6個並べられており今日の試合を終えた人間が食事をしていた。トラストは、カウンターで食事を貰い空いている席に食事を置き座る。

静かに、食事をしていると近くで食事をしていた数人の人間が細々とトラストに声を掛けてきた。

「トラスト。此処を出たいと思わないか？」

「なんだ、いきなり？」

「此処を出るんだよ！ 嫌じゃないのか！？ 死ぬまで見世物にされるんだぞ！」

「嫌に決まっているだろ！ だが、そう思い行動を起こして失敗した奴らがどうなったか知っているだろ？」

そう声を掛けてきた奴の言葉にトラストは、こちらの思いも知らずにと思い声を荒げてしまふ。しかし、相手は声を荒げたことを気にした様子もなく話を続けている。

「だから、人を集めているんだ。人を集めれば脱出に成功する人間も出てくるだろう。だけど、もし失敗しても恨みっこ無しという条件だけだな」

「いいだろう……いつだ？」

トラストは、自分が失敗するとは考えず相手の提案を受ける。

「2日後。皆で暴動を起こす、その隙にそれぞれ逃げるんだ」

食事を終え、自分が眠る牢屋へと戻る。牢屋に戻ると、床に直接横になり先ほど男に言われた暴動の話思い出し自分の脱出ルートを考える。

第1話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第2話（前書き）

お待たせしました。第2話です

第2話

食堂で、暴動の話聞き2日経った。そう、もう暴動を起こす当日になつていた。トラストは、緊張で心を押し潰されそうになりながらも自分が入っていた牢屋を、離れる。

牢屋を出ると、そのまま食事をするため食堂へと向かう。食堂へ着き、カウンターで、今日の朝食を受け取り入り口から一番遠い奥の空いている席へと座る。席へ座り、トラストはふと気まぐれに周りに居る人たちを見回す。

食堂に居る人間が纏う雰囲気は、今日の試合で死ぬかも知れないという緊張とも、脱出に掛けるこれからの未来を思つての緊張。両方と感じられる何とも固い雰囲気を食堂全体に蔓延させていた。

この食堂に居る何人が今日のことを知っているかは知らないが、この雰囲気になるのは仕方がないと思う。トラストだって、緊張しているのだから。

食堂の緊張した雰囲気を感しながら食事を進めていると、入り口に槍を持った兵士が2人左右に立ち、その間に豪華な服に身を包んだ男が立つていた。

「貴様たち、今日の闘技には我がウムブラ王国の英雄で在らせられるトウレチエ・D・フロウ様が見に来られる。貴様達、くれぐれも不甲斐ない試合を見せるんじゃないぞ！」

豪華な服を着ている人物から発せられた思いもよらぬ言葉に椅子が倒れる音を食堂内に響かせながら、立ち上がってしまう。その音を聞き周りで食事をしていた人間は、どうした？ と問いかける視線をトラストに向ける。しかし、トラストは自分が見られていると気づかず、落ち着け！ と自分を落ち着かせようと精一杯だった。そして、いつまでも立ち続けているトラストに気を悪くしたのか男

が眉を顰めてトラストに顔を向ける。

「貴様！ 座れ！」

トラストを見た男が、そう怒鳴りながら側に控える2人の兵士にトラストの方向を指し示すと兵士2人は槍を構えながら、トラストへと急ぎ足で駆け寄っていく。

未だに、立ち続けるトラストの後ろから左右に挟み込むように兵士2人は立つ。そして右に立つ兵士がトラストの左肩を、槍の刃の逆位置する石突きで叩きトラストの意識を自分にへと向けさせる。

トラストは、左肩を叩かれた様な気がして後ろを振り向く。するとそこには入り口に居たはずの兵士2人が、槍を構えた状態で自分の左右に立っている状態だった。その事に少し驚きながら、兵士が用件を話し出すまで待つことにする。待つことにするといっても、奴隷である自分たちは同じ奴隷同士以外では話す権利さえ持っていないから、待つことしか出来ないのだが。

「貴様！ カトウーロ様の言葉が聞こえなかったのか！？ さつさと座れ！」

右に立っていた兵士が、そう言うてきた。カトウーロってのは入り口に立っている男。そいつが、何かを言ったみたいだが自分がカトウーロのお言葉を無視したから、カトウーロの側を離れ此処まで来たという事なんだろう。

トラストは、この場で騒ぎを起こし脱出のチャンス逃すつもりは無い。素直に兵士に言われた通りに、倒れていた椅子を直し腰掛ける。

トラストが、素直に腰掛けるのを見た兵士2人はホッと安心した表情を見せた。大分、緊張していたようだった。たぶん、兵士2人はトラストが暴れて周りに居る奴らも触発されて、暴れられたら幾ら

装備を固めようと勝てないとわかっているのだから緊張するのも当たり前かと2人を見る。

そして、2人は直ぐに意識を引き締めトラストから離れていく。トラストから離れて、入り口まで100トルメ。丁度、部屋の中央に差し掛かると兵士2人が考えていたことが現実となる。

一斉に、トラスト以外が立ち上がったのではないかと思うぐらいの奴隷が立ち上がったのだ。そして、兵士の近くに居た奴隷たちは何が起こったのか分からず突っ立ったままの兵士から槍を奪い取り、即座に槍を兵士の心臓の部分へと突き刺す。

槍を心臓に突き刺され、血を噴き出しながら兵士2人は絶命し床を血で汚しながら倒れる。そして、何が起こったのか分からない内に護衛である兵士2人を失ったカトウーロは、悲鳴を上げながら何処かに走り去っていった。

トラストは、食堂内でのいきなりの出来事に驚き呆然と笑い出す奴隷たちを見やる。まさか、この場で暴動を起こすとは思ひもしなかった。確かに、起こすタイミングはチャンスがあればと聞かされていたが、てっきり闘技中に起こすものだと思っていたのだ。

「では、皆！^{みんな} 外で会おう！！」

そう男が、大声で言うと奴隷たちは雄叫びを上げながら食堂を離れていく。トラストも、呆然としている場合ではないと思ひ気を引き締め、皆が食堂を出て行く所を食事を受け取るカウンターへと走りより、体をカウンターの上に横たえらせ乗り越える。

乗り越えた先には、騒ぎのためか作っている途中の料理を放棄した跡を残し誰一人居ない状態だった。が、トラストは気にした様子もなく奥へ続く扉を潜る。

扉を潜った先には、たぶんコック達の更衣室か何かに続く上り階段と、『この先、危険！』と書かれた木の立て札が立てられている下り階段があった。トラストは、その『この先、危険！』の立て札を

1度見ると、深呼吸をし階段を下りていった。

階段を降りると、階段の先に壊された鉄格子がある以外何も空
間へと出た。トラストは、そのまま鉄格子を潜ろうとすると後ろか
ら声を掛けられる。

「おい！ ちょっと待ってくれ！」

トラストが、後ろを振り向くと腰の部分に2本の剣を差している長
身の男がゆっくりと歩いて来ている所だった。そのゆっくりとした
動作について、いらぬ声を掛けてしまう。

「無事、外に出たかったら急いだほうが良い」

「あはは、兵士に捕まる心配？ 君……もしかして此処の事。何も
知らない？」

未だに、ゆっくりとした動きでこちらに近づいてくる男に注意をし
たつもりが笑われてしまい気を悪くする。そして、つい素っ気ない
態度を取ってしまう。

「何を？」

「あはは、ごめんごめん。気を悪くしちゃったかな。でもね、この
道で心配するべきは、自分の命だよ」

「どういふことだ？」

「何、簡単な事さ。この道の先には、魔物が生息している洞窟に繋
がっている。何故、そんな入り口が存在しているのかは分からない
が、魔物が追手の代わりに逃亡者を殺してくれると言うわけさ」

トラストは、男に言われた事を一瞬だけ考えるが自分の目的は復讐
だ。もし、復讐の前に命を失うなら、復讐に対する想いが足りなか
ったとそこまでだったと諦めるさと考え、男を無視しそのまま鉄格

子の先へ行こうと歩き出す。

「だから、待てっ！」

トラストは再び律儀に足を止め、後ろを振り向くが視線にさっさと用件を話せという気配を含ませる。すると、男が視線に込められた言葉に気づいたのかは分からないが声を掛けてきた理由を話し出した。

「この道を選んだのも何かの縁だ。外まで一緒に行動しないか？」
「好きにしる」

男の提案に、トラストは素っ気なく答え今度こそ鉄格子を潜る。トラストの行動に、今までゆっくりしていた男が慌てて鉄格子を潜ってくる。

「ハロス！ ハロス・リーパーだ！ 外までだけど、よろしくな！」

よろしくと言われ、トラストは三度ハロスと名乗った男へと振り向く。振り向くとハロスは、腰に差していた剣を1本鞘ごと抜き取りトラストへと差し出してくる。何故、差し出してくるのか分からず受け取らずにいると、ハロスは苦笑を浮かべて喋りだした。

「この先、魔物が居るって言っただろう？ 素手で戦うのは厳しいぜ？」

「ああ、ありがとう。……トラスト。トラスト・フロウ」

トラストは、お礼を言いハロスが差し出す剣を受け取る。剣を受け取ると後ろに振り向き、自分の名前を名乗って歩き出す。ハロスはその場で立ったまま、トラストが名乗ったその名前を何度も口に出

し頭に刻み込もうとしている。

トラストは、そのハロスの行動に気づいた様子もなく歩く。途中で、ハロスが距離が離れていることに気づいて、覚えたばかりのトラストの名を連呼しながら駆け寄ってくるのだった。

第2話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8459y/>

トラスト物語

2011年11月29日02時49分発行